目白大学　総合科学研究
第19号　2023年2月　25-35

論文

保育者の音楽的な表現が子どもの音楽的な表現に与える影響

Effects of musical expression by preschool teachers on the musical expression of children

川見 夕貴　峯村 恒平
（Yuki KAWAMI　Kohei MINEMURA）

Abstract：
In childcare and early childhood education, teachers routinely perform various "musical expressions" such as singing, playing, dancing with music, and acting. The purpose of this study was to determine the effects of musical expression by preschool teachers on the musical expression of children as ascertained by the preschool teachers themselves. The teachers examined both the quantitative and qualitative aspects of expression and reported the following effects: those related to “an ability to learn,” “personality,” etc., namely “psychological effects,” and “music education-type effects.” We also found that the musical expression by said teachers served as motivation for the children to express themselves musically.

キーワード：保育者の表現、音楽的な表現、音楽教育
Keywords：expression by preschool teachers / musical expression / music education

1. はじめに

保育者[1)]は、保育や幼児教育において日常的に歌唱や演奏、音楽とともに踊る、何かになりきるなど多様な“音楽的な表現”を行っている。音楽的な表現は、保育者の専門性の一種であり、特に「子ども理解の深化」や「保育者自身のアイデンティティ」と結びついている[2)]。

小池（2009）は、「保育者の音楽的な表現」を演奏や歌唱などの音楽表現だけではなく、音楽とともに行う活動である踊りや何かになりきる身体的な表現、言葉の抑揚や声色、リズム、擬音語、擬態語などによる言語表現とし、「保育者の音楽的な表現」に「保育者の音楽的な感受性」「音楽志向性」「幼児の音楽的な表現に対する信念」が与える影響と「保育者の音楽的な表現」が「幼児の音楽的な表現」に与える影響について量的検討を行っている。そして、（1）保育者の「視聴覚を通した感受性」が、「保育者の音楽的な表現」と「音楽活動の実際」を介して、「幼児の身体的な表現」に影響を及ぼすこと、（2）保育者の「身体表現」が、「音楽活動の内容」を介し、「幼児の身体的な表現」に影響を与えることを明らかにしている。

保育者の音楽的な表現については、様々な捉え方があり、小池（2012）は幼児の創造的な音楽表現を引き出すためには、保育者が音楽的な表現を見せ、それにより幼児を「魅了する」ことが重要であるとしている。また、伊藤（2011）

川見 夕貴：人間学部児童教育学科助手
峯村 恒平：人間学部児童教育学科専任講師

は、保育者は自分の持てる最大限の力で、表現することの喜びを幼児に伝え、共感し、表現を発展させていく使命を担っていると述べている。そして、藤田（1969）は、保育者には、音楽に関する技能だけでなく「その曲に陶酔したいきいきとした表現」と指導力が求められるとし、保育者が入る場合には「子どもの心になって、表現体になり切った表現を、しかも大人のせい一ぱいの大きな動きですること」が良い指導であると述べており、その際には、子どもの手本としてではなく、「子どもの仲間になって、邪魔にならないように」踊ることが重要であるとしている[3)]。

小池（2012）は、保育者の表現を幼児に見せることを重視しており、保育者の「憧れを形成するモデルとしての役割[4)]」を強調していると捉えることができる。そして、伊藤（2011）は、表現することの喜びを幼児に伝えること、共感することを、藤田（1966・1969・1983）は、保育者自身も音楽の中に入り込んで表現することや「子どもの心」になって表現をすることを重視しており、特に、保育者の「子どもとの共同作業者、子どもと共鳴する者としての役割」について述べていると捉えることができる。

以上のように、保育者の音楽的な表現が子どもの音楽的な表現に影響を与えることやその重要性については検討されている。では、保育者自身は、実際にどのような影響を自覚して音楽的な表現を行っているのだろうか。本研究の目的は、この影響についての認識と保育者自身の音楽的な表現の関係について検討するとともに、保育者の音楽的な表現が子どもの音楽的な表現に与える影響を保育者自身の捉えから明らかにすることである。

なお、本稿の第 1 章および第 4 章、第 5 章は川見が、第 2 章および第 3 章は峯村が執筆を担当する。

2. 研究方法

2. 1. 調査の概要

本研究では、上記の目的のために調査票調査を実施した。具体的には、インターネット上での調査事業を提供する、アイブリッジ（株）の「Freeasy」を利用したインターネット調査である。

2. 2. 調査の流れと対象者

調査は、スクリーニング調査、本調査の順に実施した。スクリーニング調査は、2022年 8 月に、Freeasyが提要するターゲット情報から、全国、20歳から39歳以下の男女、業種として「医療・福祉職」、「教育職」で登録されているモニターに、「職業」を問う調査を10000件に達するまで実施した。その後、2022年 9 月に、スクリーニング調査で「保育士」ないし「幼稚園教諭」と回答した人を対象に、300件に達するまで本調査を実施した。なお、モニター属性情報として、年齢の提供を受け、また本調査では「保育士」ないし「幼稚園教諭」の経験年数についてフェイスシート項目として聞いた。

2. 3. 調査内容

まず、本研究では、保育や幼児教育で行われる「音楽的な表現」について、『保育所保育指針』（厚生労働省，2017）や、『幼稚園教育要領』（文部科学省，2017）における領域「表現」の内容のうち、「音や動きなどで表現」を取り上げ、「音楽的な表現」を特に歌唱や演奏、音楽とともに行う身体的な表現とした。想定される保育者の音楽的な表現として、本研究では「先生が歌唱する」、「先生が伴奏や演奏をする」、「先生が踊る」、「先生が演じる（なりきる）」の 4 種に絞り、保育者の関わりや、影響の認識について調査することとした。

その上で本調査では、「子どもの音楽的な表現に与える影響」について、量的、質的両面で聞いた。具体的には、上記の 4 種の表現のそれぞれについて、「子どもにどの程度影響があると思いますか」として「 4 とても大きい」、「 3 やや大きい」、「 2 あまり大きくない」、「 1 ほとんどない」の 4 件法で聞き、「幼稚園、保育園等の先生である自分自身も子どもたちと一緒

に、音楽の中に入り込んで夢中になって、歌ったり、伴奏や演奏したりすることは、子どもたちにどのような影響を与えると思いますか」として自由記述で聞いた。

また、「保育者自身の音楽的な表現」については、上記の 4 種の表現それぞれについて、以下を聞いた。まず、小池（2012）や藤田（1969）がいうように「魅了」や「陶酔したいきいきとした表現」が重要であるという視点から、「入り込んで」、「夢中になって」という 2 側面について 4 種の表現× 4 件法（4とてもよくしている、3 ときどきしている、2 あまりしていない、1 全くしていない）で聞いた。藤田（1966・1969・1983）がいうように、「子どもの心になって」という側面について 4 種の表現× 4 件法（4とてもよくしている、3 ときどきしている、2 あまりしていない、1 全くしていない）で聞いた。伊藤（2011）の「喜びを幼児に伝える」という視点から「楽しい」と感じているかどうかについて 4 種の表現× 4 件法（4とてもそう感じる、3 まあそう感じる、2 あまりそう感じない、1 全くそう感じない）で聞いた。

2. 4. 倫理的配慮

本件インターネット調査は、氏名・住所等の個人情報を無記名とする方法で行われており、モニターは個人の名前・住所等の個人情報が研究者に提供されない旨、説明を受け、同意のうえで回答を行った。また調査には自由意志によって参加され、「アンケート完了」ボタンをクリックして回答データを送信するまでは、いつでも回答を止めることができること、想定される回答時間、目的や内容等を明示したうえで実施した。

2. 5. 分析方法

4 件法で聞いた部分については、SPSS 22.0 にて分析を行った。自由記述で聞いた部分については、KH Coder 3 による頻度分析及び、実際の回答を複数の研究者らでアフターコーディングしたうえで、内容分析を行った。

表1. 量的調査部分の記述統計量

		n	*ave.*	*s.d.*
年齢		300	30.24	4.48
総経験年数		300	9.24	4.36
入り込んで	歌っている	300	3.63	0.52
	伴奏や演奏をしている	300	3.18	0.87
	踊っている	300	3.57	0.64
	演じている	300	3.35	0.74
夢中になって	歌っている	300	3.43	0.66
	伴奏や演奏をしている	300	3.08	0.87
	踊っている	300	3.44	0.70
	演じている	300	3.29	0.74
子どもの気持ちになって	歌っている	300	3.37	0.69
	伴奏や演奏をしている	300	3.08	0.91
	踊っている	300	3.36	0.74
	演じている	300	3.28	0.74
楽しいと感じる	歌うこと	300	3.58	0.63
	伴奏や演奏をすること	300	3.36	0.76
	踊ること	300	3.60	0.64
	演じること	300	3.50	0.67
子どもの表現に与える影響	先生の歌唱	300	3.40	0.65
	先生の伴奏や演奏	300	3.22	0.71
	先生の踊り	300	3.40	0.66
	先生の演技	300	3.46	0.63

3. 保育者自身の音楽的な表現が子どもの音楽的な表現に与える影響

本章では、4 件法で聞いた部分について、主に重回帰分析を通じてその関係性を明らかにする。

3. 1. 記述統計量

年齢、総経験年数、「２．３．調査内容」で示した各質問項目の記述統計量は、表 1 のとおりである。スクリーニング調査の見込み数と、想定サンプル数の試算から、調査対象は20歳から39歳以下としたところ、本調査で回収できた回答は、平均30.24歳となり、総経験年数の平均は9.24年であった。

3. 2. 変数の作成－因子分析

子どもの表現に与える影響を従属変数とする重回帰分析により、保育者が自身のどのような音楽的な表現が、子どもの表現に影響を与えると認識しているかについて明らかにする。そのために、「入り込んで」、「夢中になって」、「子どもの気持ちになって」、「楽しいと感じる」、「子どもの表現に与える影響」のそれぞれについて、因子分析を行い、傾向が同一であれば 1 つの変数として分析を進めることとした。因子分析は、最尤法、プロマックス回転で行った。その結果、全てについて「伴奏や演奏」のみ0.6に満たず、因子得点が低かった。また、クロンバックの α 計数を算出したところ、やはり「伴奏や演奏」を除いた方が α 計数は高くなったことから、以下では「伴奏や演奏」と「歌唱・踊り・演技」の影響について分析を進めることとする。なお、「歌唱・踊り・演技」については以下、「入り込んで」、「夢中になって」、「子どもの気持ちになって」、「楽しいと感じる」、「子どもの表現に与える影響」のそれぞれについて、3 項目の平均をとった値による変数を作成し、以後の分析を行う。また、3 項目による α 計数は、「入り込んで」が、α =.762、「夢中になって」が、α =.846、「子どもの気持ちになって」が、α =.880、「楽しいと感じる」が、α =.868、「子どもに与える影響」が、α =.832であった。また、それぞれ間の相関係数は、以下表 2、表 3 の通りであった。

表2.「伴奏や演奏」の各変数との相関

	入り込んで	夢中になって	子どもの気持ちになって	楽しいと感じる
夢中になって	.789 **			
子どもの気持ちになって	.641 **	.685 **		
楽しいと感じる	.499 **	.529 **	.560 **	
子どもの表現に与える影響	.363 **	.307 **	.341 **	.353 **

**: p<.001

表3.「歌唱・踊り・演技」の各変数との相関

	入り込んで	夢中になって	子どもの気持ちになって	楽しいと感じる
夢中になって	.773 **			
子どもの気持ちになって	.646 **	.708 **		
楽しいと感じる	.533 **	.602 **	.560 **	
子どもの表現に与える影響	.387 **	.364 **	.384 **	.384 **

**: p<.001

3. 3. 子どもの表現に与える影響

では、実際に「伴奏や演奏」が子どもの表現に与える影響と、「歌唱・踊り・演技」が子どもの表現に与える影響のそれぞれについて、重回帰分析を通じて、検討する。表 4 が「伴奏や演奏」に関して、子どもの表現に与える影響を従属変数とする重回帰分析の結果、表 5 が「歌唱・踊り・演技」が子どもの表現に与える影響を従属変数とする重回帰分析の結果である。統制変数として、年齢と、総経験年数を投入したが、これら 2 変数同士のVIF値が高く、多重共線性が疑われたため、年齢のみを投入した。

結果として、まず表 4 から、「伴奏や演奏」が子どもの表現に与える影響については、「入り込んで伴奏や演奏をよくしている」ほど、「伴奏や演奏を楽しいと感じている」ほど、高いことがわかる。表 5 から「歌唱・踊り・演技」が子どもの表現に与える影響については、「入り込んで歌唱・踊り・演技をよくしている」ほど、「子どもの気持ちになって歌唱・踊り・演技をよくしている」ほど、「歌唱・踊り・演技を楽しいと感じている」ほど、高いことがわかる。どちらにも共通に有意なのは、「入り込んで」と、「楽しいと感じる」である。保育者自身が楽しいと感じて音楽的な表現をしている、保育者自身が音楽の中に入り込んで音楽的な表現をしているほど、保育者の音楽的な表現が子どもの表現に影響を与えると考えていることがわかる。「歌唱・踊り・演技」についてはさらに、子どもの気持ちになって音楽的な表現をしていることも、保育者の音楽的な表現が子どもの音楽的な表現に影響を与えると考えている。子どもの気持ちになって、入り込んで、保育者自身も楽しいと感じながら、音楽的な表現をすることが、子どもの音楽的な表現と一定の関係があることが示唆される。

表4.「伴奏や演奏」が子どもの表現に与える影響を従属変数とする重回帰分析の結果

	β	*t*	
入り込んで	0.24	2.75	***
夢中になって	-0.08	-0.83	*n.s.*
子どもの気持ちになって	0.12	1.58	*n.s.*
楽しいと感じる	0.21	3.09	***
年齢	-0.01	-0.22	*n.s.*
F	12.80		***
r^2	0.18		
Adj. r^2	0.17		

*** : $p<.001$

表5.「歌唱・踊り・演技」が子どもの表現に与える影響を従属変数とする重回帰分析の結果

	β	*t*	
入り込んで	0.19	2.30	**
夢中になって	-0.03	-0.30	*n.s.*
子どもの気持ちになって	0.16	2.04	**
楽しいと感じる	0.21	3.09	***
年齢	-0.05	-0.97	*n.s.*
F	15.52		***
r 2	0.21		
Adj. r 2	0.20		

** : $p<.05$, *** : $p<.001$

4. 保育者の歌唱や伴奏、演奏が子どもの音楽的な表現に与える影響

本章では、第 2 章 3 節で述べた調査内容のうち、自由記述で尋ねた「保育者の歌唱や伴奏、演奏が子どもの音楽的な表現に与える影響[5)]」について分析する。有効回答数は、全体の約94.7%に当たる284件であり、そこから「なし」と回答した 9 件を差し引いた275件を本分析の対象とした。まず、収集したデータの傾向を捉えるために、KH Coder 3 を用いて頻出語を品詞ごとに抽出した（表6）。

KH Coder 3 による分析の結果、総抽出語数（使用[8)]）：1909（841）、異なり語数[9)]（使用）：321（232）となり、文書の単純集計は、文：134、段落：118となった。

全体を通して形容詞である「楽しい」が最頻出語であり、「楽しむ」「楽しめる」も含めて152件抽出された。長谷川（2016）は、保育者養成

表6. 頻出語[6)]

頻度	名詞	数	サ変名詞	数	形容動詞	数	動詞	数	形容詞	数
1	子ども[7)]	82	表現	67	豊か	18	思う	69	楽しい	105
2	音楽	39	保育	22	夢中	15	楽しむ	36		
3	気持ち	21	一緒	20	好き	8	歌う	21		
4	先生	20	影響	15			感じる	21		
5	自分	17	真似	10			思える	18		
6	興味	15	活動	8			伝える	12		
7	感性	11					楽しめる	11		
8	音程	9					見る	11		
9	リズム	8					持つ	9		
10	大人	8					繋がる	8		
11							知る	8		

課程の学生に「子どもにどのような音楽経験をさせたいか」と問いかけると「楽しい」「楽しむ」が必ず多く挙がるキーワードであると述べており、本調査から保育者も「楽しい」を重視していることがわかる。これは、楽しさを主体とした活動によって、「美しさ」を感じることができる感性を養うという幼児教育における音楽教育の特徴[10)]に基づくものであると捉えることができる。

名詞（サ変名詞を含む）の最頻出語は、「子ども」であり、「表現」「音楽」「保育」「気持ち」と続いた。「気持ち」は、「楽しい」「気持ち」、やってみようという「気持ち」といった用いられ方をしていた。動詞では、「思う」が最頻出しており、「楽しむ」「歌う」「感じる」と続いた。「感じる」には、子どもが「楽しさ」を「感じる」といった子どもを主語とするものと、保育者がどう「感じる」かといった保育者を主語とするものの両者が含まれていた。

4. 1. 保育者の音楽的な表現の影響

音楽は、生理的、心理的、社会的な働きを内在している。これらの 3 つの働きは、音や音楽を用いた活動の中だけでなく、日常生活の中でも意識的、無意識的に経験されるものである。当然ながら、保育、幼児教育における音楽活動、保育者の歌唱や伴奏、演奏にも 3 つの作用が内在しており、これらは子どもや保育者など、音楽を共有している人々に影響を与える。そのため、本研究では「保育者の歌唱や伴奏、演奏が子どもの音楽的な表現に与える影響」についての保育者の記述を分析するための軸として、「生理的影響」「心理的影響」「社会的影響」を用いる。それに加え、音楽教育的な観点として、『幼稚園教育要領』（文部科学省，2017）、『保育所保育指針』（厚生労働省，2017）に示されている生きる力を育むための、資質・能力である「知識及び技能の基礎」「思考力、判断力、表現力の基礎」「学びに向かう力、人間性等」を分析のための軸として用いる。駒（2020）は、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」のうち、領域「表現」と最も深く関わっているのは「豊かな感性と表現」であるとし、「豊かな感性と表現」を 3 つの資質・能力の視点から読み取っている。「知識及び技能の基礎」に該当するのは、「心を動かす出来事などに触れ感性を働かせる中で、様々な素材の特徴や表現の仕方などに気付き」という箇所であり、「思考力、判断力、表現力等の基礎」は、「感じたことや考えたことを自分で表現したり、友達同士で表現する過程を楽しんだりし」に該当し、「学びに向かう力、人間性等」は、「表現する喜びを味わい、意欲をもつようになる」に該当する[11)]。

以上から、保育者による記述を「生理的影響」「心理的影響」「社会的影響」「音楽教育的影響　知識及び技能の基礎」「音楽教育的影響　思考力、判断力、表現力の基礎」「音楽教育的影響　学びに向かう人間性等」の 6 種に分類した（表

表7. 子どもの音楽的な表現に与える影響の分類[12)]

分類	記述例[13)]	件数
生理的影響	・脳が刺激される	6
心理的影響	・子供たちに音楽の楽しさが伝わる ・子供も入り込んで夢中になれる	117
社会的影響	・協調性、人と関わることの楽しさ ・楽しさを共有することで関係ができる	27
知識及び技能の基礎	・正しいリズム、音程を知ることが出来る ・子どもの発声の仕方、音の感じ方に影響する	22
思考力、判断力、表現力等の基礎	・表現力が豊かになると思う ・子どもたちが共に楽しむ中で子どもたちの様々な表現を引き出す影響もあると思います。	35
学びに向かう力、人間性等	・子どもたちの感性を磨くことにつながる ・音楽の楽しさ、伴奏や演奏したりすることの楽しさに気づくきっかけとなる	81

7)。なお、複数の要素を含む記述については、複数の分類を与えた。

最も件数が多かったのは、「心理的影響」に関する記述であり、次いで「音楽教育的影響　学びに向かう力、人間性等」（以下、「学びに向かう力、人間性等」とする）であった。「音楽教育的影響　思考力、判断力、表現力等の基礎」（以下、「思考力、判断力、表現力等の基礎」とする）「社会的影響」「音楽教育的影響　知識及び技能の基礎」（以下、「知識及び技能の基礎」とする）「生理的影響」に関する記述は比較的少数であった。

「生理的影響」に関する記述は、6 件であり、脳への影響や発達に関する記述が中心であった。「知識及び技能の基礎」に関する記述は、22件であり、「正しいリズム、音程を知ることが出来る」「子どもの発声の仕方、音の感じ方に影響する」など技能に関する記述がみられた。「社会的影響」に関する記述は、「協調性、人と関わることの楽しさ」「楽しさを共有することで関係ができる」などであり、音楽活動を通して他者との関係を築くこと、見本や憧れの存在としての保育者についての記述がみられた。「思考力、判断力、表現力等の基礎」に関する記述には、「表現力が豊かになると思う」「子どもたちが共に楽しむ中で子どもたちの様々な表現を引き出す影響もあると思います」など、表現力に関する記述が中心となっていた。

4. 2. 保育者の音楽的な表現の「心理的影響」

「心理的影響」、音楽教育的影響である「学びに向かう力、人間性等」は、117件、81件と他の項目と比較して多数みられたことから、それぞれの記述内容をより詳細に捉えるために、アフターコーディングを行った（表 8、表9）。

保育者の音楽的な表現が子どもに与える心理的影響に関する記述を、「楽しさ」「安心感」「満足感、達成感」「その他」にコード化した（表8）。「楽しさ」に関する記述が最も多く、「安心感」に関する記述、「満足感、達成感等」に関する記述も見られた。「楽しさ」に関する記述は、さらに詳細にコード化を行い、「表現する楽しさ」「音楽の楽しさ」「その世界を楽しむこと」「楽しさ全般」とした。「表現する楽しさ」と「音楽の楽しさ」の違いは、後者には音楽鑑賞などより広い音楽的な行為を含む点である。「表現する楽しさ」に関する影響は、「夢中になっている保育士の姿を見て、子どももたのしいきもちになり、歌うことや演じることが楽しいと自然に思えるのではないかと感じる」などである。また、「音楽の楽しさ」に関する影響は、「音楽に触れる楽しさ面白さに影響を与える」などである。

「その世界を楽しむこと」に関する影響は、「子どもたちも一緒に楽しんで歌えたり、この時期にしか味わえない空想の世界を楽しむことができる」「保育士が一緒に楽しむことで、子どもたちがよりその世界観に入って楽しむことが

表8.「心理的影響」に関する保育者の記述

コード	記述例		件数	
楽しさ	表現する楽しさ	・表現すること、歌うことの楽しさを感じられる ・夢中になっている保育士の姿を見て、子どももたのしいきもちになり、歌うことや演じることが楽しいと自然に思えるのではないかと感じる	17	85
	音楽の楽しさ	・音楽に触れる楽しさ面白さに影響を与える ・音楽の楽しさを伝える事ができると思う	20	
	その世界を楽しむこと	・子どもたちも一緒に楽しんで歌えたり、この時期にしか味わえない空想の世界を楽しむことができる ・保育士が一緒に楽しむことで、子どもたちがよりその世界観に入って楽しむことができる	4	
	楽しさ全般	・やはり、子どもは楽しいことが好きで、先生が楽しみながら行っていることには影響を受けるので、先生も楽しむことが大事 ・子どもたちも同じようにめいっぱい楽しんだり、表現したりできるようになると思う	44	
安心感	・保育者の姿を見て子どもたちが安心できる。楽しい雰囲気の中で安心して表現しようとできると思う ・保育者が率先して夢中になることで、その姿を見た子どもたちも、「自分も自由に表現していいんだ」と感じることができるのではないかと思います		9	
満足感、達成感等	・子どもたちのその活動に関するやる気や、達成感に関わってくるように感じる ・子どもの満足感につながる		6	
その他	・憧れの気持ちを育てる ・一緒に楽しさを味わい、共感してくれる喜びを感じることができると思う		17	

表9.「学びに向かう力、人間性等」に関する保育者の記述

コード	記述例	件数
感性、感受性	・子どもたちの想像力や感受性を豊かにすること ・子どもたちの感性を磨くことにつながる	26
意欲	・先生みたいにやりたい！と思う気持ちが芽生えると思う ・恥ずかしいと思っている子への、やってみようと思える雰囲気作りに良いと思う。	20
きっかけ	・楽しさを伝え、音楽に触れたり好きになるきっかけをつくる ・表現することの楽しさを味わい、様々な事に興味を持つきっかけになるのではないかと思う	16
興味、関心	・保育士が見本になるので、楽しんでいる姿を見ると興味を持つようになる ・子どもが音楽、歌を好きになるきっかけになり、音楽への興味が広がると感じる。	9
好きになること	・音楽をより好きになると思う ・子どもも歌や合奏が好きになると思う。	5
その他	・表現の面白さを伝える	8

できる」などである。本コードは、件数自体は少ないが、「空想の世界」に入って表現する、遊ぶという際には、保育者自身もその世界に入り込むことが重要であると考える。

「安心感」は、「保育者の姿を見て子どもたちが安心できる。楽しい雰囲気の中で安心して表現しようとできると思う」「保育者が率先して夢中になることで、その姿を見た子どもたちも、『自分も自由に表現していいんだ』と感じることができるのではないかと思います」などである。子どもたちは、保育者の音楽的な表現を感じ、その表現に支えられて表現を行っていると捉えることができる。

4. 3. 保育者の音楽的な表現の「学びに向かう力、人間性等」への影響

音楽教育的影響である「学びに向かう力、人間性等」に関する記述内容をより詳細に捉えるために、表 9 のようにアフターコーディングを行った。

保育者の音楽的な表現が子どもの「学びに向かう力、人間性等」に与える影響を「感性、感受性」「意欲」「きっかけ」「関心、興味」「好きになること」にコード化した。子どもの「感性、感受性」に関する記述が最も多く、「意欲」「きっかけ」「興味、関心」「好きになること」と続いた。「感性、感受性」には、「子どもたちの想像力や感受性を豊かにすること」「子どもたちの感性を磨くことにつながる」などがあり、保育者の音楽的な表現が子どもの感性や感受性を豊かにすると捉えられていた。「意欲」への影響に関する記述は、「先生みたいにやりたい！と思う気持ちが芽生えると思う」「恥ずかしいと思っている子への、やってみようと思える雰囲気作りに良いと思う」などである。「きっかけ」に関する影響は、「楽しさを伝え、音楽に触れたり好きになるきっかけをつくる」などである。「興味、関心」に関する影響は、「保育士が見本になるので、楽しんでいる姿を見ると興味を持つようになる」「子どもが音楽、歌を好きになるきっかけになり、音楽への興味が広がると感じる」などである。「好きになること」に関する影響は、「音楽をより好きになると思う」「子どもも歌や合奏が好きになると思う」などである。「意欲」「きっかけ」「興味、関心」「好きになること」は互いに結びついており、保育者が音楽に入り込んで、夢中で音楽的な表現を行っていることで、子どもが「興味、関心」をもつ、保育者の姿を見て「やってみたい」という意欲をもつ、子どもが音楽に触れる、音楽を楽しむ「きっかけ」になる、子どもが音楽を「好きになる」と捉えられている。

5. 考察

本研究では、第一に重回帰分析によって、①音楽に入り込んで伴奏や演奏を頻繁にしている保育者ほど、伴奏や演奏を楽しいと感じており、それらが子どもの音楽的な表現に与える影響についても大きいと認識していたこと、②音楽に入り込んで、歌唱や踊り、演技を頻繁にしている保育者ほど、子どもの気持ちになってそれらをよくしており、それらを楽しいと感じ、それらが子どもの音楽的な表現に与える影響についても大きいと認識していたことを明らかにした。①②ともに、子どもへの影響が大きいと認識している保育者は、それに伴った行動として、音楽に入り込んだ表現を頻繁に行っており、また、それを楽しいと感じているといえる。そのため、保育者自身が音楽的な表現を楽しめるかどうかが、保育や幼児教育において重要であると捉えた。

そして、第二に保育者の歌唱や伴奏、演奏が子どもの音楽的な表現に与える影響について、「生理的影響」「心理的影響」「社会的影響」「音楽教育的影響」の観点から分析した。これにより、保育者自身が自覚している子どもへの影響は、「心理的影響」や音楽教育的影響である「学びに向かう力、人間性等」に関する影響が中心となっていることが明らかになった。幼児期の教育は、生涯にわたる人格形成の基礎を培うものであることから、特にこれらの影響は重要であるといえる。

「心理的影響」は、「楽しさ」に関する記述が主であり、「安心感」や「達成感、満足感等」への影響に関する記述も見られた。また、「学びに向かう力、人間性等」に関する影響は、「感性、感受性」「意欲」「きっかけ」「関心、興味」「好きになること」にコード化することができた。これらの内容分析から、音や音楽そのものだけではなく、保育者が楽しんで音楽的な表現をしていることは、子どもが音楽活動に興味や関心をもつきっかけや意欲になるということ、安心して活動することや子どもも楽しめることに結びつくことが見出された。保育者という存在が重要であり、保育者が楽しんでいるからこそ、その音楽的な表現に対して関心をもち、やってみたいと思う場合もあるのではないだろうか。

つまり、保育者の音楽的な表現は、子どもを音楽的な表現へと動機づける一要素であり、子どもの表現を支えるものであると捉えることができる。

小池（2009）は、保育者の「身体表現」が「幼児の身体的な表現」に影響を与えることを明らかにしているが、本研究では、保育者自身の捉えから、保育者の歌唱や伴奏、演奏が子どもの音楽的な表現に与える影響として、「心理的影響」「学びに向かう力、人間性等」に関する影響が見出された。木村（2019）は、保育者に求められる音楽の専門性として、①遊びや生活の中に見出される子どもの表現を受け止め、経験の意味を捉え、子どもが表現者としてより豊かに育っていくことを支え導くための専門性をもつこと、②自身が文化的実践者としてのモデルであると同時に、文化的実践に向かおうとする子どもをガイドする役割をも担うことを挙げている。本研究で見出された「心理的影響」「学びに向かう力、人間性等」に関する影響は、保育者に求められる音楽の専門性である、子どもが表現者としてより豊かに育っていくことを支え導くための専門性や文化的実践に向かおうとする子どもをガイドする役割と密接に結びついているといえる。

音・音楽はそれ自体が子どもの興味、関心の対象であり、子どもを引き付けるものである。保育者が楽しんで音楽的な表現を行うことで、子どもも楽しんで音楽的な表現をすることができるということについては、その「楽しさ」の質や保育者の音楽的な表現の質について今後、さらに検討していく必要がある。

【脚注】

1）幼稚園教諭、保育士を指す。

2）香曽我部（2011）は、保育者論における保育者の専門性を「保育者の本質」「現代社会が保育者に求める専門性」「保育者集団の中で求められる専門性」「保育者個人に求められる専門性」の4種に分類し、「保育者個人に求められる専門性」の下位分類として、「保育課程・保育内容への理解」「指導法の理解と修得」「子ども理解の深化」「保育者アイデンティティ」を位置付けている。

3）藤田妙子（1966）「子どもの動きのリズム『自由表現』に関する考察」,『駒沢女子短期大学研究紀要』創刊号，pp.101-110

4）『幼稚園教育要領解説』（文部科学省, 2018）には、教師の役割として、①子どもが行っている活動の理解者としての役割、②子どもとの共同作業者、子どもと共鳴する者としての役割、③憧れを形成するモデルとしての役割、④遊びの援助者としての役割の4種が示されている。

5）「幼稚園、保育園等の先生である自分自身も、子どもたちと一緒に音楽の中に入り込んで夢中になって、歌ったり、伴奏や演奏をしたりすることは、子どもたちにどのような影響を与えると思いますか」

6）8回以上頻出した品詞を示している。

7）「子供」も含む

8）総抽出語数から、助詞、助動詞を省いた分析の対象となる語数

9）分析対象となる語の種類

10）長谷川恭子（2016）「幼児の音楽教育における「美しさ」の在り方に関する一考察」,『実践女子大学生活科学部紀要』第53号，pp.49-58
文部科学省（2018）『幼稚園教育要領解説』

11）駒久美子（2020）「領域『表現』における音楽表現の扱い」,『コンパス　音楽表現』，建帛社，pp.2-3

12）「楽しむ」は、心理的影響として分類し、「好き」や「意欲をもつ」「親しむ」などは、音楽を愛好する心情として、「学びに向かう力、人間性等」に分類した。

13）以降、アンケート回答は原文ママ掲載する。誤字、脱字等があった場合のみ、筆者らで修正を行っている。記述に複数の分類を含む場合には、該当する部分のみを抜粋して掲載している。

【引用・参考文献】

藤田妙子（1966）.「幼児の動きのリズム『自由表現』に関する考察」『駒沢女子短期大学研究紀要』創刊号，pp.101-110

藤田妙子（1969）.「『音楽リズム』という領域における 幼児の発達段階による指導目標」『駒沢女子短期大学研究紀要』第3号，pp.41-52

藤田妙子（1983）.『自由表現ABC』，フレーベル館

長谷川恭子（2016）.「幼児の音楽教育における「美しさ」の在り方に関する一考察」『実践女子大学生活科学部紀要』第53号，pp.49-58

伊藤仁美（2011）.「保育者に必要とされる音楽表

現力の育成に関する一考察（2）」『こども教育宝仙大学紀要』第2巻，pp.11-25
木村充子（2019）.「保育者の専門性という観点から見た実技の位置付け」『音楽教育研究ハンドブック』，音楽之友社，pp.228-229
小池美知子（2009）.「保育者の音楽的感受性が幼児の音楽表現に及ぼす影響」『保育学研究』第47巻第2号，pp.60-69
小池美知子（2012）.「幼児の創造的な音楽表現と保育者の専門性―5歳児クラスでの実践を通して―」『松山東雲女子大学人文科学部紀要』第20巻，pp.37-51
香曽我部琢（2011）.「保育者の専門性を捉えるパラダイムシフトがもたらした問題」『東北大学大学院教育学研究科研究年報』第59巻2号，pp.53-68
駒久美子（2020）.「領域『表現』における音楽表現の扱い」『コンパス　音楽表現』，建帛社，pp.1-3
厚生労働省（2017）.『保育所保育指針』
文部科学省（2017）.『幼稚園教育要領』